

芸の転換

—上七軒楓錦会の誕生—

中原 逸郎 (楓錦会)

本発表は、京都上七軒花街（かがい）の花柳流導入の背景を探ることを目的とする。

花街（花柳界と同じ）は、日本舞踊等の芸と地元の花街言葉で顧客をもてなす芸妓町で、江戸中期以降、三味線音楽の進展とともに発達した。花街は芸の継承の課題を度々解決し、今日までその音と舞踊の文化を継承してきた。その継承の課題解決の一例に大正期の上七軒（上京区）楓錦会の誕生があると発表者は考える。

明治初年に祇園甲部は井上流への舞踊の一元化を図った。これに対し、上七軒は篠塚流の舞踊を継承していたが、明治末期に継承問題から篠塚流が衰退すると、花街の存続をかけて新たな舞踊を取り入れる必要に迫られた。この時、上七軒では歌舞伎の振り付けに妙を得た花柳流（東京）を選択した。上七軒はなぜ、花柳流を選択したのだろうか。

上七軒の花柳流の導入期に関しては、1923（大正12）年の関東大震災による花柳流の東京の教場打撃と芸の習得者の新規開拓の必要から、大震災後と考えることもできる。しかし、上七軒楓錦会の活動に注目すると、上七軒は大正10、11年には温習会（おさらい会）を実施し、さらに1917（大正6）年の温習会プログラムも存在するため、大正初期をその導入期と考えることができそうである。

本発表では、上七軒の花柳流導入の実態を知るため、限られた資料ではあるが、楓錦会の大正期のプログラムの演題を比較し、上七軒の出し物における花柳流の影響を確認する。さらにこの導入の社会的・経済的背景を考察する。調査の結果、上七軒で従来から上演されていた義太夫等に加え、長唄の演題が確認でき、楓錦会が花柳流の芸の継承の橋渡しの役割を果たした可能性を確認する。なお、本発表では1932（昭和11）年の楓錦会の記録（無声映像）を参考のために上映する。